連尺の子供たちは、バニヤ小学校で催された本校の児童作品展の写真を見て、歓声をあげた。十一月には本校でもバニヤの作品展を開き、会期中にPTAは講演会も催す。児童の交換訪問の実現を望む親もある。

英語を習う子もふえている。今春来校したエドモントン・ロータリー・クラブ六名の方の歓迎集会で、児童会は日英どちらのことばであいさつしようかと聞き、私たちがびっくりした。その日いっしょに植えて下さった国際児童年記念のライラックは、今すくすくと伸びている。

〈佳作〉

十年目のカナダ生活

真壁知子（在オンタリオ州トロント）

私とカナダとの関わりは、今からちょうど十年前の一九六九年十月十日にはじまった。この一年は十周年目にあたるわけで、私は私なりにささやかな祝いなどせねばと思っていたのである。日加両国も正式に外交関係を樹立して五十年とか。そうすると、その五分の一にもあたる間を、日本人である私がカナダの社会で生きてきたということは、十分意味のあることのように思えてくる。

ちょうど十年前、私は東部にある大学で勉学をつづけるために、留学生として、単身はじめてカナダの土を踏んだ。飛行場におり立ったとき、夏の終りの、澄んだ冷たい風が、私を震え上らせたのを今でも憶えている。

私が入学を許された大学では、今から思えばささやかな額ではあったが、外国人か否かにかかわらず大学院の学生のほとんど全員にアシスタントシップを出していたから、それを唯一の学費と頼んで、私は貧しい学生生活をはじめたのであった。入学後間もなく、大学の事務部からアシスタントとして仕事をし、所得をうるためには、「移民」の滞在資格を得ねばならぬという知らせがあって、あたふたとわずか三か月後に、私はその資格を取らされる羽目になった。多くの先輩日系人一世が、出稼ぎとして太平洋を渡ってきたように、私は〝出稼ぎ〟を〝留学〟におき代えただけで日本を出てきたのであった。出来るだけ早く目的を果たして帰国すること以外に、私の考えることはなかった。外国で移民になることは、永住か半永住を意味する。私には、物質的にも精神的にもその準備が全くなかったから、その資格を受けるのを躊躇したのであった。

かくて、全く主体性もなしに「移民」の滞在資格を得たのであるが、今から思えば、それはその後私がカナダで生きていく上に大変な便宜をもたらした。私がずっと後に、新しい一員としてこの社会で生きていくという決心をする上にも、大きなきっかけになった。移民としての地位を得たことによって、アルバイトをして生活費を稼ぐことも出来るようになったし、二年目からは州政府の出す奨学金に応募する資格を得て、幸運にもその後の三年間は奨学金を与えられた。それによって、働きながら学業を続けていく私の生活の基礎が整ったのであった。当時のカナダの社会には、まだ戦後の移民ブームの名残りがあって、右も左もわからぬ新来者をそのまま受け入れて吸収してしまう大らかさがあった。この十年間、移民に対する世論も経済情勢も大きく変わったけれど、カナダが世界でも数少ない移民の国であることから、私は思いがけずその恩恵にあずかったのであった。今なお世界のあらゆる人間に公平に門戸を開いて移住者を受け入れている国（カナダだけではないが）があるということは、賞讃に値する。難民を二、三人入国させるかどうかと大さわぎをしている日本と比べて考えてみるとき、まだ世界のどこかに数少ない入国の門戸が開かれていることの意義は大きい。私のように全く偶然に受け入れられた者のためばかりでなく、真にカナダを必要とする人、本当にカナダで生活したい人のために、入国の門は将来もずっと閉ざされずにおいて欲しい、閉ざしてはいけないと、今私は一市民として念じている。

私のカナダでの最初の休日は、感謝祭の週末であった。「カナダの休日」をしようという友人と一緒に、ナイアガラまで一泊旅行をした。ものすごい水しぶきを上げて流れ落ちる滝と、道々遠々と続く紅葉の見事さが印象的であった。雄大なカナダの自然は、社会の大らかさの象徴であるとも言えよう。

私がカナダに来た翌年に日本で万国博があって、日本を訪ねたカナダ人も少なくなかった。まだカナダドルも値打ちのあった頃で、東洋の神秘の国もようやく一般のカナダ人（と言っても中流以上の人であるが）に「行ってみたい」という気を起こさせるほどになっていた。新聞やテレビが特集を組んで、盛んに日本紹介をやっていた。私は後の参考にと思ってよく見るようにし、記事など集めておいたりした。日本製の小型車がカナダの冬にも十分耐えられることを証明し、街中で目立つようになってきた。地方の小さな町の中学校や高校の地理の時間など